

令和5年度 矢作川自然再生検討会 議事概要

日 時：令和6年2月20日（火）14:10～16:10

会 場：豊田市崇化館交流館 第一研修室

1. 開 会

2. 挨拶（豊橋河川事務所 所長）

3. 議 事

（1）前回意見対応

事務局より説明した。意見等なし。

（2）令和5年度 モニタリング結果（ヨシ原、干潟）

事務局より説明した。委員からの主な意見は、次のとおり。

<ヨシ原>

- ・令和5年ヨシ植えイベント（5/27開催）で植えたヨシは、6/2台風に伴う大規模出水でほとんどが流失してしまい残念。令和4年度施工区のワンドでは、夏には泳ぐ子どもを確認しており、ワンド造成が生物環境以外にも寄与していると考えている。
- ・冬季鳥類調査ではヨシの生育密度が上昇しており、ヨシ原内に入っただけの調査が実施できなかったことから、過年度と比較してやや確認数が少なくなった可能性がある。
- ・植生調査で確認された植物重要種の確認位置は整理されているか。また、エビ・カニ類や鳥類の確認傾向に変化は認められたか。
 - 植物の重要種の具体的な確認位置は整理していない。なお、タコノアシやシロネはヨシ原内で確認されており、ミズマツバはR4施工区内の自然裸地で確認された。エビ・カニ類の確認傾向は過年度から変化はなく、ほとんどがヨシ原内での確認であった。また、鳥類も概ね変化はなく、オオヨシキリは中州で多く、オオジュリンはヨシが多く生育する環境で確認されている。（事務局）
 - オオヨシキリ等のソングポストは一般的に周辺環境と比較して高い位置となる傾向にあり、ソングポストが繁殖範囲の中心に位置するものではないことは留意する必要がある。
- ・6/2出水は、東海豪雨と同規模とあるが、どのような流況であったか。
 - 米津観測所における最高水位で見ると東海豪雨時を超過していたが、矢作ダム含む上流域の降雨が多く、流量では東海豪雨の方が大きかったものと思われる。東海豪雨は山間部で大規模な降雨が認められたことに対して、6/2出水では乙川等の中下流域での降雨が中心で、河川水位が高くなっていた。（事務局）
 - 山間部には矢作ダムが存在し、洪水調整がなされているが、乙川流域にはダムがなく、また、増水の時間帯が満潮時と重なっており、水位が高くなった可能性が考えられる。

<干潟>

- ・堤防側での底生動物の確認数が多い傾向にあった理由は、地形などの環境が安定している

ことが要因か。

→ 環境が安定していることに加えて、堤防側の一部はヨシ原に隣接しており、ヨシ原に生息する種（カワザンショウガイ科等）が確認されたことも一因であるとする。（事務局）

→ ヨシ原を含む堤防付近の測点ではヨシ原からの有機物の供給により、他の測点と比較して生息量が多くなった可能性も考えられる。

- ・ 0.6k 測線における酸化還元電位は還元傾向であるが、どう考えるか。

→ 資料で示す測点は施工区中央付近で河床侵食が進行している箇所であるため、これが要因と考えられる。

- ・ UAV 測量を用いた地盤高の変遷を見ると、中央部に砂州前縁線の形成が明瞭に確認されており、今後は左岸側において砂州が更に下流に移動すると思われる。これまでのモニタリングでは、砂州が施工範囲周辺に到達する正（堆積傾向）のモードでのモニタリングであったが、今後は砂州が下流に移動する負（浸食傾向）のモードとなると想定している。知見の蓄積のためにもモニタリングを継続することが望ましいと考える。

- ・ ゴカイ類の確認個体数が少ない点について、施工区で生息量を増加するためには有機物量が足りないと考えられる。有機物量が増加すると強熱減量等は増加し、環境の劣化等と評価されるものと思われることから、必ずしも環境が劣化しているわけではなく、程度問題と考える。

→ 干潟施工区全体を面的にみると、河床材料が砂ばかりの分布を示しているのは気になる点である。

→ ゴカイ類を採食するシギ・チドリ類は、0k より下流側の河口付近でしか確認されなくなっており、有機物量の関係が影響していると考えられる。

- ・ 有機物は、干潟の地盤高の高い箇所には堆積せず、砂州の背後（下流側）などの地盤高の低い箇所に堆積すると考えられる。

窪地の箇所に土砂を投入しても、地形変化にあわせて結局似た環境が形成されることになるため、窪地に投入することに固執せず、（面的にみて）柔軟に進めていけば良い。海での貧酸素問題は河口域では想定されず、生物資源量を増やすためには有機物の多い箇所も必要となると考える。

- ・ 令和 5 年度の鳥類の動向としては、過年度と比較して非常に特異な様相を呈していた。越冬期のカモの飛来数が少なく、また矢作川河口部周辺は全国的にみてもケリの多い地域であるにもかかわらず、2 月までさえずりが全く確認されなかった。令和 5 年度のみで結果で評価をすることは困難であるとする。

(3) 矢作川自然再生計画【河口部再生編】計画見直し

事務局より説明した。委員からの主な意見は、次のとおり。

<ヨシ原>

- ・ 上塚橋の上流側は、過去に樹木伐採工事が実施されたため、砂州面積が広くなり、たまりが点在しているが、ヨシ原は少ない状況。今後の再生候補として検討してほしい。
- ・ 豊田市御立公園の河川敷でせせらぎ水路を整備したが、当初は良い環境であったが時間経

過に伴い、水際には外来種が繁茂し、立ち入れなくなった事例がある。外来種の繁茂対策をどのように考えているか。

→ 冠水頻度を高めることで侵入抑制の可能性があると考えている。長期的な植生管理はコストもかかるため、今後も検討していきたい。(事務局)

<干潟>

- ・河川の土砂は本来、海に供給されていくものとする。河口部での干潟施工には関係機関との調整が必要であり、当面の施工は0～1km区間での実施として理解した。
- ・施工を考える上で、0kより下流側はかつての航路浚渫など人的な影響から河道地形が変化し、干潟面積が増加傾向にある区間であり、どこまで干潟の地盤高が形成されていくか推移をみていくと良い。一方、0～1k区間は、自然砂州が形成されてきているなかで、干潟造成によりそれをサポートしている区間とみることが出来る。
- ・アサリの定着では、三河湾全体からみても減少傾向にあり、干潟の減少や栄養塩の減少など様々な要因が示唆されている。一方、豊川では干潟造成後にすぐにアサリが着底するわけではなくモニタリングを続けているところ。海の関係機関とも協力し、引き続きご指導を頂きながら事業を進めていきたい。(事務局)

<共通>

- ・自然再生事業として、ヨシ原の管理を維持工事等と連携して進めていく考え方は良い。一方、大前提として河道計画として区間ごとのセグメントがあるが、矢作川の河道状況での区分や河床勾配、川幅との関係を踏まえ、議論していくことが必要である。河川環境管理シートも1kピッチの整理であるが、河川工学でみている空間スケールを踏まえ、評価していくと良い。

(4) 次年度 干潟施工計画

事務局より説明した。委員からの主な意見は、次のとおり。

- ・1/50 横断勾配での施工計画であるが、出水等による吸出し効果で細粒分が下流側へ流れ、形状は変化すると思われる。こういった事も想定して施工を進めていくと良い。

4. その他

- ・令和6年度 ヨシ植えイベントの開催案内について事務局より説明。意見等なし。

5. 閉 会

以 上